深浦円覚寺所蔵《神道関係資料》箚記

――津軽における〝もうひとつの宗教文化圏〟の位相――

弘前大学人文社会科学部　原　克昭

一　はじめに

真言宗醍醐派の古刹として知られる深浦の春光山円覚寺に襲蔵される聖教類の中には、浩瀚な真言宗関係・修験道関係の資料群に混ざって、一連の《神道関係資料》が少なからず伝存している。本稿では、そのような《神道関係資料》を摘出し焦点化することによって、中世期から近世期そして幕末明治期を挟んだ近代における宗教資料の諸位相を捉え返すことを目的とする。その過程において、津軽における〝もうひとつの宗教文化圏〟――すなわち、津軽の神道網絡圏（神道ネットワーク）の隻影をあぶりだしてみたい。

まずは、深浦円覚寺聖教群の中から《神道関係資料》をリストアップしておく。

①『修験宗神道 神社印信〈五拾六通〉』（甲）［尊岸函８１］
②『修験宗神道 神社印信〈五拾六通〉』（乙）［尊岸函６］
③『三元十八神道次第』［尊岸函６６］
④『神道遷宮大事』［尊岸函１３９］
⑤『神道護摩私大事』［義観函１０５］
⑥『神道護摩私大事』［諸師１函２３］
⑦『御流神道伝授聞書 附灌頂見聞記』［諸師２函２９］
⑧『両部習合灌頂次第』［諸師２函４６］
⑨『両部習合灌頂次第』［諸師４函３７］

今後の調査の進展状況により、さらなる資料の存在が発掘される可能性も期待されるが、ひとまず現段階において確認される《神道関係資料》は以上の通りである。

二　深浦円覚寺所蔵《神道関係資料》概観

以下、それぞれ書誌情報の摘要と併せて、諸書の性格と伝領過程を概観していく(1)。

■第二十四世・尊岸（一八〇三―一八七二）関連の《神道関係資料》Ⅰ

①『修験宗神道 神社印信〈五拾六通〉』（甲）［尊岸函８１］
〔年次〕文政七年（一八二四）永朝→尊岸（伝受）
〔表紙〕神道ネシントウト読隠字也／尊岸（墨署）
醍醐東谷ヨリ伝来
修験宗／神道　神社印信　五拾六通
翁大事幷幣串寸法
〔奥書〕元禄三庚午（一六九〇）如月十八日書写畢／釈快隆判
醍醐晃深師所持内写レ之
文政七甲申（一八二四）三月十三日書写畢
授与　津軽深浦智教房／尊岸
伝師／松峯山大先達法印永朝示之

②『修験宗神道 神社印信〈五拾六通〉』（乙）［尊岸函６］
〔年次〕慶応三年（一八六七）尊岸（再転写）
〔表紙〕　尊岸（墨署）
醍醐東谷ヨリ伝来／翁大事并幣串寸法

修験宗／神道　神社印信（五拾六通）
翁大事（幷）幣串寸法
〔奥書〕元禄三（庚午）（一六九〇）如月十八日書写畢／（秋田）釈快隆判
醍醐晃深師所持内写之
文政七（甲申）年（一八二四）
／三月十三日書写伝受　津軽深浦
春光山智教房／尊岸
松峯山大先達法印／永朝（示之）
慶應三（丁卯）年（一八六七）　春光山円覚寺
十月十一日　尊岸再写

①②『修験宗神道 神社印信』（甲）・（乙）両書とその関係性については、すでに本報告書・第二集に渡辺麻里子氏による解題が提示されている(2)。当該解題で解説されるように、②本（乙）は①本（甲）をもとに尊岸が手ずから再転写したものである。このような営為は他の修験道系印信類にも見受けられるものであり、尊岸による伝受印信類の再転写という営為の意義は、現代の資料調査の指標としても資する点で、まさしく現代のアーカイブズ（資料保存）に相通ずる文化的事業として瞠目すべき意義を有することも指摘したところである(3)。また、その全五十六通の内容については、神社祭祀関係をはじめ兵法武具類や日用生活に関する修法など、いわゆる修験道神道に属する印信集成である(4)。その伝来過程は、文化一一年～嘉永四年（一八一四―一八五一）に松峯山大行院に住持していた永朝を介して、尊岸自身が伝授された経緯が確認された(5)。

ところが、それに対して以下の《神道関係資料》③～④（尊岸函）・⑤（義観函）は、明らかに修験道神道とは系統を異にする。

■第二十四世・尊岸（一八〇三―一八七二）関連の《神道関係資料》Ⅱ

③『三元十八神道次第』［尊岸函６６］
〔年次〕慶応四年（一八六八）妙海→尊岸（伝受・拝写）
〔奥書〕慶應四（戊辰）年十月廿一日書写之
伝師　津軽弘前　金剛山現住／院家／大阿闍梨法印妙海
授与／春光山円覚寺／尊岸拝写

④『神道遷宮大事』［尊岸函１３９］
〔年次〕未詳（祐正→寛能→・・・→尊岸伝領）
〔表紙〕授与寛能／尊岸（朱方印）
〔奥書〕天台沙門大阿闍梨法印祐正示之（花押）／授与寛能

■第二十六世・義観（一八五五―一九二一）関連の《神道関係資料》

⑤『神道護摩私大事』［義観函１０５］
〔年次〕明治三年（一八七〇）義観（伝受・書写）
〔奥書〕弘前／金剛山光明寺最勝院院家／伝燈大阿闍梨権大僧都妙海
明治三（庚午）歳六月廿九日
義観房／秀海一日（ニ）而／書写之

ここで注目されるのが、③⑤の伝授者として名を載せる金剛山光明寺最勝院院家・妙海（一八三一―一九〇七、還俗時は齋藤妙海）の存在である。はたして、円覚寺所蔵《神道関係資料》には、妙海自身の手沢本⑦⑧が伝存する。その他の諸師函と併せて確認しておく。

■諸師函・妙海（一八三一―一九〇七）関連の《神道関係資料》

⑥『神道護摩私大事』［諸師１函２３］
〔年次〕明和八年（一七七一）某（書写・伝領）
〔奥書〕山城綴喜郡玉水西福寺

神祇伝燈大阿闍梨権大僧都／活済上人
明和八辛卯歳十月廿三日
京六波羅密寺隠居智門法印／以所持次第校合畢

⑦『御流神道伝授聞書 附灌頂見聞記』［諸師2函29］
〔年次〕安政五年（一八五八）妙海（伝受・聞書）
表紙「安政五午年二月朔日始妙海」

⑧『両部習合灌頂次第』［諸師2函46］
〔年次〕天明八年（一七八八）本をもって妙海（校正）
〔奥書〕（朱書）天明八申師老十六日写之終
（朱書）伝燈大阿闍梨権大僧都法印文済（花押）
御流神道玉水流従第二世文済／法印第六世之資／妙海校正了

⑨『両部習合灌頂次第』［諸師4函37］
〔年次〕未詳（江戸中期写）
〔奥書〕なし

うち、⑤義観本『神道護摩私大事』については、すでに報告書第二集に同じく渡辺麻里子氏による解題が提示されており(6)、③⑥⑦⑧については本集【3】～【6】に解題を掲載したので、詳細はそちらを参照されたい。これら一連の《神道関係資料》は、大行院・永朝経由の修験道神道とは別途に、最勝院・妙海を介して円覚寺にもたらされた網絡の存在が推察できる。では、妙海の伝える神道とは何だったのか。それこそが、「山城綴喜郡玉水西福寺」（⑥）を本拠として「活済」（⑥）・「文済」（⑧）によって近世期に展開された「御流神道玉水流」（⑧）にほかならない。ひきつづき、御流神道玉水流とその伝播について、最新の研究現況を参看しつつ確認しておく。

三　御流神道玉水流をめぐる研究現況

上掲のごとく、尊岸伝受の③『三元十八神道次第』、義観伝受の⑥『神道護摩私大事』ともに、妙海より伝授された神道であり、げんに妙海自身が「御流神道玉水流」を銘打つことより、この一連の《神道関係資料》が修験道神道とは異なる網絡にあることは確かである。では、妙海のもたらした御流神道玉水流とはどのような神道であったのか。最新の研究によって、次のような位相にあったことが徐々に解明されつつある(7)。

御流神道は真言宗に伝わる神道（両部神道）の一派で、玉水流は活済（一七〇八―）を開祖とする神道流派である。活済の活動履歴と法流は以下の通りである。

享保一四年（一七二九）　南都千光院において神道灌頂に入壇、御流神道を受法
延享元年　（一七四四）　南都空海寺において神道灌頂を執行、入壇者は七〇〇〇人におよぶ）
宝暦五年　（一七五五）　上狛村延命院において、英性より高野山系の御流神道を受法
明和八年　（一七七一）　御流神道玉水流を再構築（南都系＋高野山系）
明和二年　（一七六五）　～安永五年（一七七六）学僧一五〇人に御流神道玉水流を伝授
寛政元年　（一七八九）　南山城・西福寺において御流神道玉水流の神道灌頂を執行。智積院・鑁啓が入壇（→※以後、智積院・鑁啓流が本流となる。）

※西福寺における法流(8)

・第3世　純濟（智積院・鑁啓本流とは別に西福寺の正嫡を継続）
・第4世　品濟
・第5世　長濟（活濟より続いた西福寺内での法流の正嫡の断絶）
・第6世　妙海（六波羅蜜寺・契理より受法）
・第7世　尭文（盛芳、六波羅蜜寺契理より受法）
・第8世　禅我（智積院瑜伽教如より受法、西福寺の玉水流復興を志すも記録なし）

第一世・活濟―第二世文濟によって展開された南山城・西福寺を基点とする御流神道玉水流は、活濟より続いた西福寺内での法流の正嫡は第五世・長濟で途切れ、智積院・鑁啓の流派が本流となったという。爾後、幕末明治期には西福寺における玉水流復興を志すも記録なきままに、「それから約百年後の現代では、人々の記憶から西福寺の神道灌頂は忘れられていった」という(9)。そのような失われた近世期の神道環境をめぐる寺院調査として、もっか西福寺にひきつづき、御流神道玉水流を伝承した東京・高幡不動尊調査へと発展継承されている(10)。

このような状況下にあって、御流神道玉水流が確かに津軽の地にも伝播継承されていた事実は、学術的にも注目すべきところであろう。諸書の伝来経緯に関しては各解題【3】～【6】に譲るとして、ひとまず本稿では相互補完的な後考検証を期すべく、津軽における〝もうひとつの宗教文化圏〟――すなわち、津軽の神道網絡圏（神道ネットワーク）の位相を再定位してまとめとしておく。

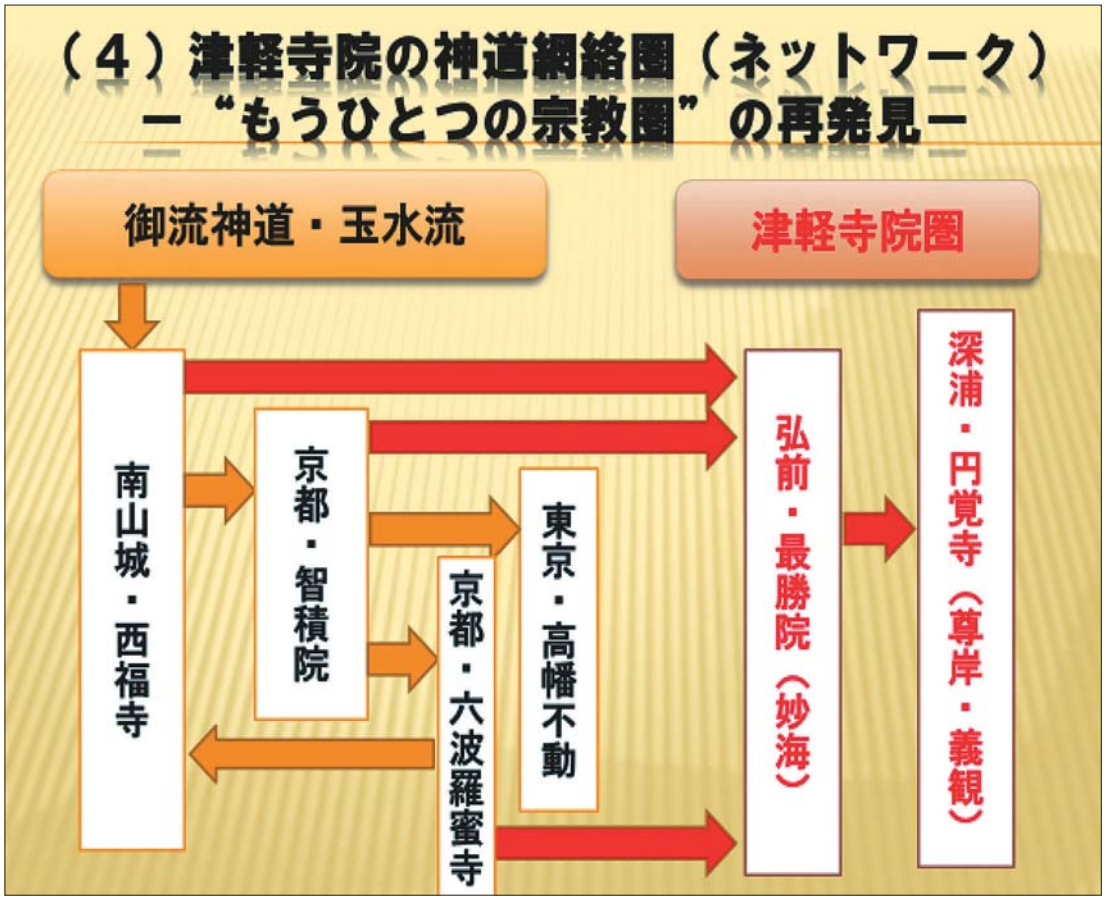
四　津軽における神道網絡圏――〝もうひとつの宗教文化圏〟の位相

そもそも、津軽の地に御流神道玉水流を伝えた妙海とはどのような人物であったのか。その活動履歴が興味ぶかいところであるが、くしくも本年に住持職を務めた最勝院より寺史が刊行され、その素姓が明らかとなってきた(11)。近刊の『最勝院史』に依拠して妙海の履歴を集約すると、その梗概は以下の通りとなる。

嘉永六年　（一八五三）　津軽・岩木山百沢寺において得度
安政二年　（一八五五）　京都・智積院へ留学
安政六年　（一八五九）　津軽・岩木山百沢寺徳蔵坊の住職拝命
元治元年　（一八六四）　南山城・西福寺の住職拝命
慶応元年　（一八六五）　弘前・最勝院第三十三世の住職拝命
慶応三年　（一八六七）　南山城・西福寺の住職を辞し、津軽へ帰国
　→※この期間に「明治維新／神仏分離／廃仏毀釈」の時期を迎える
明治三年　（一八七〇）　最勝院・勧修寺密乗院兼帯を辞し還俗
明治六年　（一八七三）　柏木村八幡宮・喰川村神明宮・牡丹森村八幡宮の宮祠拝命、同年辞職
明治一七年（一八八四）　南津軽郡公立中学校三等助教諭、翌年罷免
明治一九年（一八八六）　弘前へ帰国
明治二〇年（一八八七）　津軽横内村・常福院へ移住
明治二四年（一八九一）　僧侶復職、東京南多摩郡・喜福寺の住職拝命
明治二九年（一八九六）　弘前へ帰国、津軽横内村・常福院へ再移住

如上の履歴は、円覚寺所蔵『妙海履歴』（諸師3函46）によって跡

付けられるほか、聖教類以外にも円覚寺所蔵資料中には歌書など十数点におよぶ妙海関係資料の存在が確認される。このような激動の幕末維新期にあって、僧籍と還俗の狭間にあった妙海が円覚寺歴代へ直伝の御流神道玉水流の伝授を執行していた事績は日本宗教史的にも注目に値する。ひいては、津軽における最勝院―円覚寺の網絡圏が、真言宗ともども幕末明治期における全国規模の神道継承の拠点として機能していたことを示唆してあまりある。この〝もうひとつの宗教文化圏〟を図示すれば概ね上図のように素描することができる。



往々にして、通史的な日本宗教思想史から俯瞰するかぎり、中近世にみる「神仏習合」から明治維新期における「神仏分離／廃仏毀釈／国家神道」という図式は確かに描きやすい。しかしながら、「廃仏毀釈」現象が地域ごとに様相を異にするように、全国一律的に「神仏分離」が断行されたわけでもない。とりわけて、幕末明治期にあって中世から近世へと継承された寺院圏における神道の法脈は、近代にあってもなお、したたかに存続し続けていた事態を見逃してはならない。円覚寺に襲蔵された一連の《神道関係資料》は、そうした宗教環境の実況を如実に物語る貴重な資料群でもある。

本稿は、現在に伝えられた《神道関係資料》から幕末明治期における津軽宗教圏を逆照射することで、〝もうひとつの宗教圏〟を再発見するひとつの試みである。今後の御流神道玉水流にまつわる聖教資料調査の進展と相俟って[12]、津軽における宗教文化圏の存在意義が再定位されることを期しつつ擱筆とする。

〔注〕

（1）深浦円覚寺歴代に関しては、海浦由羽子『験乗末資海浦義観』（深浦町教育委員会、二〇〇三年）を参照。

（2）『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第二集（二〇二〇年）所収、解題【16】【17】を参照。

（3）前掲注（2）所収、拙稿「深浦円覚寺所蔵印信類の概要」を参照。

（4）前掲注（2）所収、解題【16】【17】、および宮本袈裟雄「修験道神道神社印信」（宮家準編『修験道章疏解題』、復刻『修験道章疏』別巻、二〇〇〇年）を参照。

（5）海浦由羽子「深浦円覚寺所蔵古典籍・古文書による津軽寺社の歴代住持・宮司一覧表」（本集所収）、および前掲注（2）所収、渡辺麻里子「深浦円覚寺所蔵古典籍の意義―津軽の寺院における「知のネットワーク」―」を参照。

（6）前掲注（2）所収、解題【19】を参照。なお、同解題では「修験道寺院に伝わったものと思われる、神道護摩の次第書」とされたが、修験道神道とは系統を異にすることは以下の再検討の通りである。

（7）御流神道玉水流に関する研究現況に関しては、特設展示「南山城井出町西福寺神道灌頂資料」（国文学研究資料館、二〇一四年）、シンポジウム「南山城と神道灌頂―井出町西福寺所蔵資料をめぐって」（『仏教文学』第四一号、二〇一六年）所収、中山一麿「西福寺の歴史」／向村九音「西福寺と椿井文書」／伊藤聡「西福寺の神道灌頂」／鈴木英之「神道灌頂道場図の復元」、およびＨＰ「橘氏ゆかりの御寺　遍照山西福寺」（http://henjozan.xsrv.jp/）を参照。

（8）系図は前掲注（7）中山一麿論文より転載、および歴代情報は西福寺ＨＰに拠る。

（9）前掲注（7）中山論文。

（10）科研費にかかる全国規模の寺院資料調査として、「神道灌頂に関する総合的研究―神仏習合の資料学的再構築」（代表・伊藤聡）、「地方基幹寺院に於ける文献資料調査と経蔵ネットワークの研究」（代表・中山一麿）などによって現在進行形で推進されている。

（11）『最勝院史 図版編』壹・貳（最勝院史編纂委員会、二〇二〇年）を参照。

（12）『寺院文献資料学の新展開』第一〇巻『神道資料の調査と研究Ⅰ　玉水流特集』（伊藤聡・編、臨川書店、近刊）など、今後の研究調査動向との連携が期待される。